



Title	ガンの予防
Author(s)	石上, 重行
Citation	癌と人. 1987, 14, p. 7-8
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/24035
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ガ　ン　の　予　防

石　上　重　行*

ガンは心臓病（とくに、狭心症、心筋梗塞などの虚血性心疾患）および脳卒中とともにわが国における死因の第1～3位を占め、これらは三大成人病として総括され、その対策は社会的にもとくに注目されていることは御承知のとおりであります。

人口動態統計によりますと、昭和60年におけるわが国の総死亡者数は752,259人で、その死因は多い順にガン187,714人（25.0%）、心臓病141,097人（18.8%）、脳卒中134,994人（17.9%）となり、計463,805人、すなわち、成人病による死亡が総死亡者数の約62%を占めております。なお、ガンがこのように死因のトップになつたのは昭和56年からであります。

大阪府についてみると、昭和60年の総死亡者数48,152人のうち、ガンによるものが13,276人（27.6%）、心臓病9,412人（19.5%）、脳卒中6,336人（13.2%）で、計29,024人（60.3%）にのぼっております。これは全国的の傾向とほぼ同じであります。ガンは昭和46年以来、死因の第1位を占めています。

成人病による死亡が増加している原因はいろいろ考えられますが、その一つは人口構造の高令化であります。21世紀においてはほぼ4人に1人が65才以上の超高令化社会になると予測されています。今後、この高令化の進展とともに、成人病による死亡がより一層、増加することは明らかであり、ガンは約4倍になるであろうと推定されています。

大阪府では早くからこの課題をとりあげ、昭和34年に全国に先がけて「成人病センター」を設立しました。以来、同センターにおいては成人病の早期診断と早期治療、研究ならびに調査、集団検診（集検）などの業務を推進し、さらに昭和53年には成人病の治療専門病院（病床数500）を開設、また研究所を整備し、成人病制

圧の中核施設として日夜努力いたしております。ここではガンについて、とくにその予防を中心当センターの成績の一部を述べます。

一般に、病気の予防には一次予防と二次予防とがあります（三次予防にまで範囲を広げる場合もありますが、ここでは省略いたします）。

(1) 一次予防。ガンにかかるないように予防することであります。ガンの原因が解明されていない今日の段階では「これさえやっておけば確実にガンを予防出来る」という方法はまだみつかっておりません。然しながら、原因究明のための調査、研究活動が進められ、肺ガンと喫煙、肝ガンとB型肝炎、アルコールとの関連性などの危険因子が明らかになりつつあり、また、その成果を利用しての衛生教育活動の効果も期待されます（なお、国立がんセンターによる「がんを防ぐための12ヵ条」については、本誌第13号、1986年に田口博士が記載されているので省略）。

(2) 二次予防。ガンを早期に発見し、早期に治療することによって死亡を防ぐことであります。このためには集団検診を普及させ、或は定期的に健康診断を受けるようにすすめることが大切であります。また一方において医療機関を整備し、ガンに対する医療水準の向上をはかる必要があります。

成人病センター集検第2部では昭和36年より胃集検車、また昭和43年からは集団検診棟の完成に伴つて、施設内の集検も併せ実施しております。集検発足以来昭和61年3月までのべ253,963名を検査し、そのうち481名の胃ガン患者を発見し、このうち、218名（45.3%）が早期胃ガンであります。なお、他の機関より依頼された精密検診例を含めますと1,151名、うち早期胃ガン患者は518名（45.0%）であります。

この集検で発見された胃ガン患者の予後（5

*大阪府立成人病センター総長

年生存率) は症状を訴えて受診、診断された患者に比べてきわめて良好であります。すなわち、当センターにおける集検によって発見された胃ガン患者の5年生存率は70.1%であります。これは府下における全胃ガン患者についての成績、23.7% (昭和50年～昭和54年における診断胃ガン) に比べると、はるかに高い成績であります。この集検の効果はつぎのことでも明らかであります。

すなわち、府下、能勢町では昭和37年から保健所、当センター集検2部と一体となって胃ガン集検を濃密に実施して胃ガン死亡率を全国および大阪府の平均に比べて大幅に低下させることに成功しています。これに対して昭和61年度の日本対ガン協会賞を贈られています。

さて、この「定期的」ということ、すなわち、検診間隔はどれ位が適正であるのかということは大切な問題であります。

胃集検あるいは病院の外来において早期胃ガンと診断されながら、高令・他の病気の合併などにより止むを得ず手術が出来なかった例、或は本人が手術を拒否した例などについて、その経過をみると、早期胃ガンと診断されてから手術をしないで37カ月経過すると約半数が進行ガンに進展し、また77カ月経つと約半数が胃ガンで死亡しています。この成績は「定期的な検診」の間隔に対する貴重な資料であると考えます。

つぎに、二次予防の定義の中で医療機関を整備し、医療水準の向上をはかる必要があると述べましたが、これに関連して成人病センター病

院における診療成績について簡単にまとめます。大阪府のガン罹患数は年間約1.8万人、このうち約10%，1,800人がセンター病院で診療をうけています。これは、大阪府下では最高の取り扱い数であります。病床の充床率は約97%，外来患者は1日1,000人強であります。さて、当センター病院に入院・治療したガン患者の5年生存率は約62%であります。これは、他のガン専門病院の約50%という成績に比べて高く、また一般的の平均より2倍以上の成績で、わが国最高のレベルにあると考えております。なお、このセンター病院の成績は早期ガンのみの成績ではなく、進行ガンまでも含めたものであります。これはガンの症例一つ一つについての手術方法の検討、工夫、放射線治療、化学療法などのいわゆる集学的治療、治療後の機能恢復訓練、社会復帰後の管理、指導などの当センターの基礎・臨床部門を直結した研究の成果であります。

以上、大阪府立成人病センターのガン予防、診療の現況の一部について述べました。大阪府のガン罹患数は年々増加して21世紀には年間3万人を超えるであろうと推定されています。また、ガンの発生部位も年令・年代とともにかわってくると考えられます。私どもガンの臨床の第一線にあるものは常に実態を把握・解折し、対処してゆかねばならないと覚悟を新たに致すものであります。他方、ガンの原因が解明され、これに従って、一次予防対策の確立の一日も早くからんことを願うものであります。